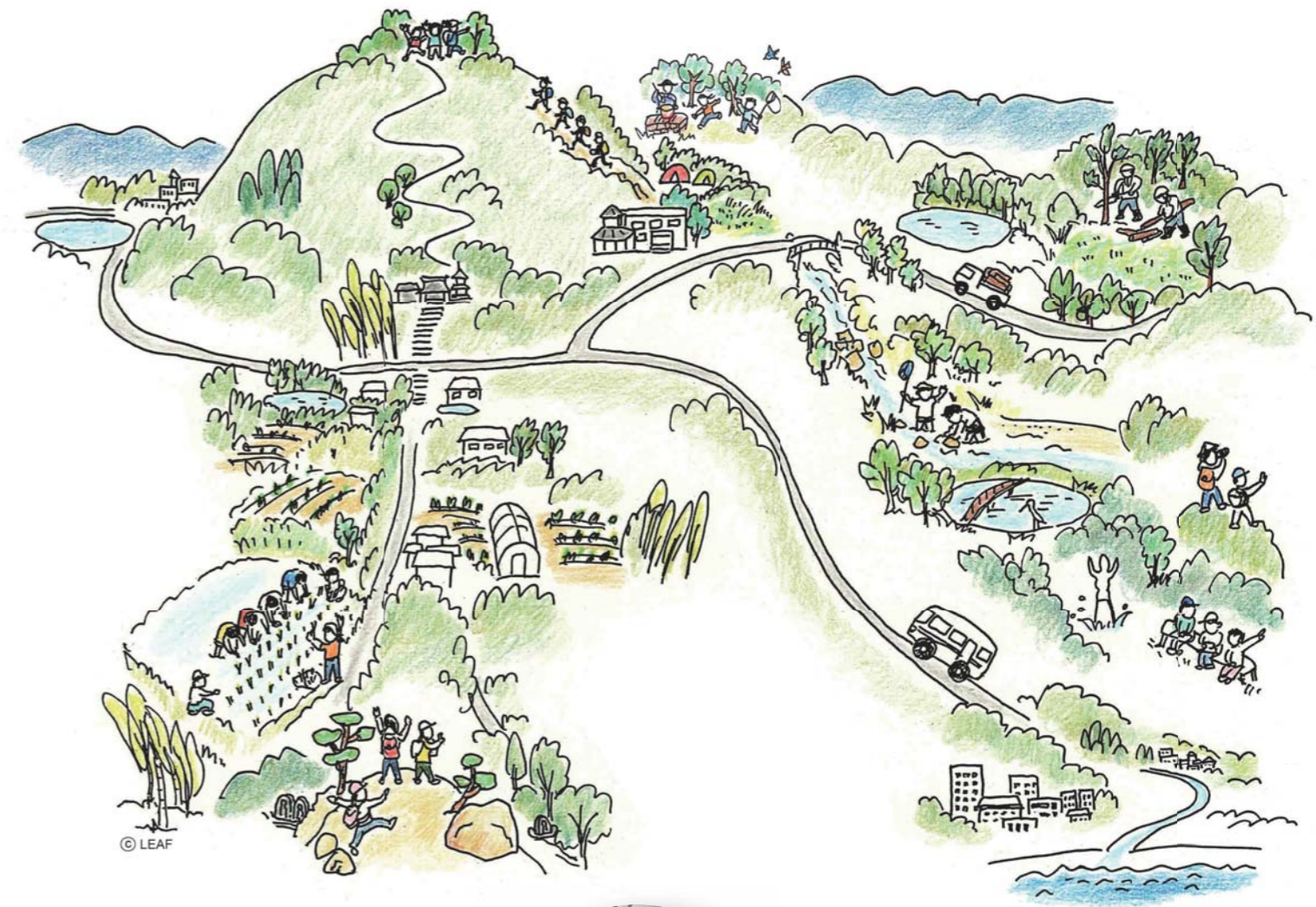


甲山グリーンエリア周辺地図



キャンプ場からはじまる 都市型里山

～地域で取り組む循環の森づくり～



西宮市立甲山自然環境センター

住所 兵庫県西宮市甲山町 67 番地
TEL 0798-72-0037



西宮市

平成 26 年 3 月策定

策定 西宮市 環境学習都市推進課

編集 西宮市 環境学習都市推進課

特定非営利活動法人 こども環境活動支援協会

問い合わせ先

TEL 0798-35-3039

FAX 0798-35-1096

E-mail vo_kangaku@nishi.or.jp

甲山グリーンエリア 地域連携保全活動計画

西宮市

I. 西宮市の生物多様性保全へ向けた取り組み

～『環境学習都市宣言』から『地域連携保全活動計画』策定へ～

西宮市のこれまでの取り組み

西宮市では平成15年(2003年)、全国で初となる『環境学習都市宣言』を行いました。この宣言には「学びあい」「参画・協働」「循環」「共生」「ネットワーク」という5つの行動憲章があり、これらをより具体化するために平成17年(2005年)、『西宮市新環境計画』を策定しました。ここでは8つの環境目標の1つに「生物多様性」を掲げています。

平成24年(2012年)3月に策定された『生物多様性にしのみや戦略』は、この戦略における目標の達成に向けて、山・川・海など生態系ごとに分けて生物多様性保全のための行動計画を示しており、この計画に沿った多様な取り組みが日々、進められています。



西宮市のこれからの取り組み

西宮市では平成24年度(2012年度)～平成25年度(2013年度)の2カ年にかけて環境省の地域生物多様性保全計画策定事業に採択され、本計画の策定をおこないました。地域連携保全活動とは、市町村やNPO、地域住民が協力・連携しながら行う生物多様性の保全活動のことです。西宮市は、豊かな自然環境に恵まれた甲山周辺にスポットをあて、その恵みを次世代にわたって享受できるよう、西宮市版『地域連携保全活動計画』を策定しました。この計画を通して『生物多様性にしのみや戦略』の重点施策の1つである「甲山グリーンエリア(※1)における里地里山整備」の推進を図ります。甲山での生物多様性保全の取り組みを継続的に進めるために、地域ぐるみで活動を行う体制を整えていきます。

(※1) 生物多様性にしのみや戦略では、甲山周辺を「甲山グリーンエリア」(P8参照)と位置付けています。



“甲山”を“都市型里山”に

～キャンプ場があるからできる西宮独自の里山循環～

豊かな自然環境に恵まれた甲山は、六甲山系の東端部に位置しており、西宮市を代表する山として多くの人に愛されています。また、周辺一帯では、環境学習施設を拠点として、キャンプ場や農地、湿原などを中心に様々な自然体験・環境学習体験活動が展開されています。

多様な生態系を有する甲山周辺(甲山グリーンエリア)には、アカマツ林やコナラ林などの二次林、農地、仁川広河原などの草地、川、池といった里地里山を構成する様々な自然環境が存在します。また、その他にも市の条例により生物保護地区に指定されている湿原や、豊かな自然環境が現存する自然保護地区が存在します。

これらの自然環境を適切に維持管理し、生物多様性をより豊かな状態で次世代に伝えるために、西宮市独自の方法で、キャンプ場を利用しながら甲山周辺に里山の機能を持たせること(以下、本計画において“都市型里山”という。)を目指します。



生物多様性地域連携促進法と地域連携保全活動

生物多様性地域連携促進法 この法律は、地域の自然的・社会的条件に応じた生物多様性の保全のための活動を(地域における多様な主体の連携による生物の多様性の保全のための活動の促進等に関する法律) 地域における多様な主体が有機的に連携して行うことを促進し、豊かな生物多様性の保全、現在及び将来の国民の健康で文化的な生活の確保に関することを目的に、平成23年(2011年)10月1日に施行されました。

地域連携保全活動 地域連携保全活動とは、市町村やNPO、地域住民等が協力・連携しながら行う自然の保全活動のことを指します。活動を通じて、地域の自然やそこに暮らす生きものの特徴、地域の文化、自然の恵みと農林水産業とのつながり等を知るとともに、昔と今の自然と暮らしの変化にも視点を向けることで、地域全体への理解が深まり、人々との交流が活発になるなど、生きものと人々がにぎわう地域づくりにもつながります。

日本の里地里山

里地里山とは

里地里山とは、原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取りまく二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域です。

里地里山の暮らしと衰退

かつては、“山で柴を刈る”“薪で火を焚く”“田畑で農作物を作る”といったような、農林業などに伴う様々な人間の働きかけ(里山の暮らし)を通じて地域の自然資源を持続的に利用することで、里地里山の環境が形成・維持されてきました。しかし、かつての里地里山の暮らしは今ではほとんど見られなくなってしまいました。その結果、利用されなくなって放置された二次林や草が増加し、里地里山は減少しつつあります。

里地里山の重要性

里地里山は、多様な生物の生息・生育環境として、また、食料や木材など自然資源の供給、良好な環境、文化の伝承の観点からも重要な役割を果たします。しかし、里地里山の減少に伴い、特有の生物の生息・生育環境の劣化による生物多様性の低下、伝統的な景観の消失などが、現在懸念されています。

里地里山を総合的に管理・保全することは、生物多様性を高めるという点においても、非常に重要な意味を持つこととなります。

生物多様性って?

生物多様性とは、すべての生きものには違いがあり、それぞれが影響を与えながら生きているということです。生物多様性条約では、生物多様性は次の3つのレベルの多様性に分類されています。私たち人間は他の生きものとの“つながり”の中で生きており、多様な生きものがお互いに影響しあってバランスを維持している現在の自然環境から、たくさんの恵みを受けて生活を営んでいます。

ところが近年では、例えば山間部においては手入れのされていない放置林の増加により、より多くの生きものが生息しにくい環境ができるなど、生物多様性が損なわれる危機にさらされています。

生態系の多様性

様々なタイプの自然があること



種の多様性

多種多様な生物がいること



遺伝子の多様性

遺伝子的特性において
個体差があること



Ⅱ. 甲山グリーンエリアは自然の宝庫

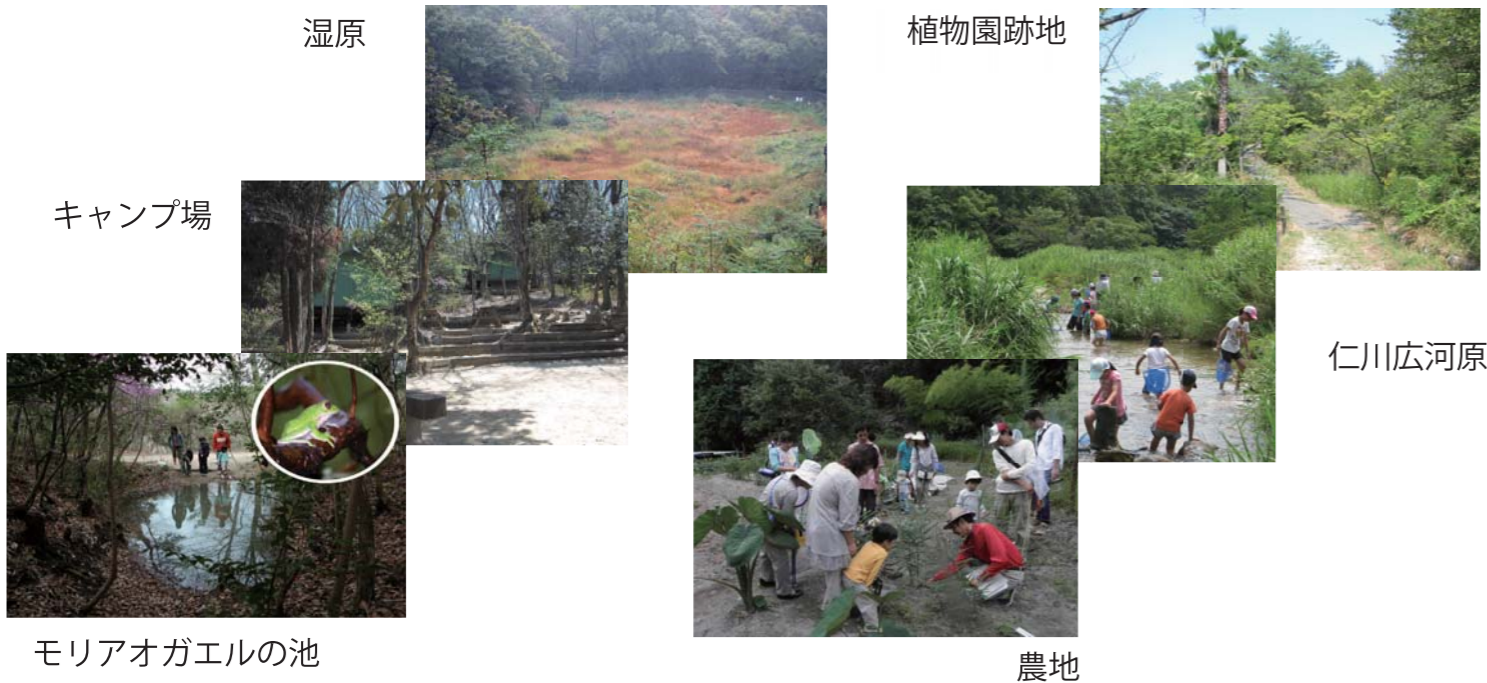
～魅力ある自然とフィールドの保全に向けての現状～

フィールドについて

甲山グリーンエリアには、山・川・池・湿原・農地といった様々な生態系があり、それらが密接につながりあうことで生物多様性に富んだ自然環境を形成しています。

そこに生息する生きものたちも多種多様で、カワセミ、モリアオガエル、ホタル等の希少な生きものたちが生息しており、自然の宝庫となっています。

また、私たちが自然にふれあえる場所として、市立のキャンプ場など、自然体験・環境学習ができるフィールドがあります。



湿原

植物園跡地

キャンプ場

仁川広河原

モリアオガエルの池

農地

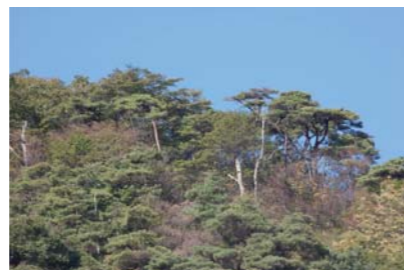
甲山の植生の現状

甲山グリーンエリアには、様々な生態系を支える多様な植生が見られます。植生の大半を占めるコナラ林やアカマツ林からなる里山林は、かつては炭や薪などを採取する場として人々に利用されていました。しかし、現在ではこれらの里山林は利用されることがなく、長い間放置されています。そのため、植生遷移が進行し、照葉樹が繁茂しつつあります。

一方、仁川沿いには、ツルヨシなどからなる河川植生が広がり、多くの野鳥などのすみかにもなっています。その他、甲山湿原を構成する湿原植生、仁川広河原の草地などが見られます。



コナラ林



アカマツ林

《生きものの現状とつながり》

甲山グリーンエリアには、多様な生きものが確認されています。これらの生きものは、エリア内の多様な生態系を利用し、食物連鎖などを通じてお互いに影響を与えながら密接なつながりを持って生きています。エリア内の生きものつながりや階層構造を模式的に示したのが次の図です。



《生物多様性保全に向けた課題》

その1. 放置された里山林 → 生物多様性のためには“手入れ”が大切！！

植生遷移の進行にともなう照葉樹の繁茂は、林内照度の低下を招きます。林冠から日光が入りやすい明るい林から、暗い林へ環境が変化することで、明るい里山林に依存して生きている多くの動植物の生息・生育環境の質の低下や喪失につながります。その結果、エリア内の生物多様性が損なわれることとなります。

生物多様性を保全するためには、里山林へ継続的に手を入れ、明るい林を維持することが重要です。

その2. 保全とエリア利活用の関連付け → 資源の利活用で生物多様性を高める！！

エリア内には、前述（P3）のとおり様々な生態系があり、ボランティアとの協働で森林や湿原の保全活動が行われています。一方、エリア内のキャンプ場では薪、農地では堆肥などを利用していますが、これまでは大半が市外で生産されたもの（甲山産ではないもの）を使用してきました。

そこで、本計画では既存の取り組みを再整理し、自然環境や生物多様性の『保全』に加えて発生する森林資源を『供給』にとらえ、キャンプ場などにおける森林資源の『利用』と関連付けます。既存の取り組みをベースとすることで、実行性の高い生物多様性の保全と持続可能な利用を目指します。